

## 5

クラウドソーシングを  
先取りした青空文庫の軌跡

— ボランティアによる電子ライブラリ活動 —

基  
般

大久保ゆう（青空文庫ボランティア）

クラウドソーシングによる  
ボランティア活動

2013年の夏、『ガッチャマン クラウズ』というテレビアニメが放映された。その題名の示す通り、往年のアニメ『科学忍者隊ガッチャマン』のシリーズ新作であるが、筆者が惹かれたのは劇中、クラウドソーシングによるボランティア活動が描かれていた点だ。作品内に登場するソーシャルネットワーキングサービス（SNS）の「GALAX」は、社会に大小の問題が生じたとき、登録された群集のなかから最適な人材をマッチングさせ、個々人の自発的慈善によって解決にあたらせる。

筆者が初期から参加しているインターネット上のボランティア活動「青空文庫」<sup>1)</sup>も、個々人の自発的行動に支えられた運動である。「インターネット図書館」と呼ばれることもあるが、それはあくまでも利用者の側面から見たイメージであり、実状としては一面しか伝えていない。活動としては、インターネットさえあれば誰にでもアクセスできる〈青空〉を1つの公開書架とし、（著作権保護期間が満了した書籍などの）自由な電子本を共有可能なものとして図書館のようにインターネット上に、個々人の自発的努力と参加によって集めている、という説明の方が妥当だろう。

不特定の群集（クラウド）によるボランティア活動は、電子ネットワークによって促進される一方、群集ゆえの弱点ももちろん否定できない。『ガッチャマン クラウズ』では、クラウド活動の脆さ・危うさもともに描写されるが、青空文庫も1997年に開設されて以来、その種の問題と無縁ではない。

本稿では、青空文庫をクラウドソーシングによるボランティア活動の先駆と捉え、その形態を解説するだけでなく、ネットワークや情報技術の発展と変遷とともに、どのように変化し、どのような問題が生じてきたかを、その将来性も見据えながら論じていきたい。

## 協働作業の変遷

クラウドソーシングは、その名付け親である Jeff Howe によれば、「何千、何万という人びとが、ほかの人びとと交流するなかで、誰かに命じられたわけでもなく、自分たちの好きなことをした結果」<sup>2)</sup>、「かつては企業の正社員だけが手がけていた仕事を、たいていは低賃金で、あるいは無償で、集団として完成させる」<sup>3)</sup> 活動だとされる。

青空文庫の場合は、本を集め、パブリッシュして市民の利用に供すること、つまりかつては図書館や出版社が担っていた仕事を、自発的な群集の意志が電腦空間で実現させたということになる。しかしその方法は、必ずしも開設から今に至るまで一様なものではない。

## ■ 初期

開設当初の青空文庫は、自然発生的でもある。草分け的なクラウドソーシングの例に漏れず、まず少数の人物が活動を始め、その周囲に人が集まり、クラウド化した。

はじめは、「呼びかけ人」とされる4名の人物が共有可能な作品のデータファイルを5冊サイト上で公開したのみで、「青空文庫の提案」として、同

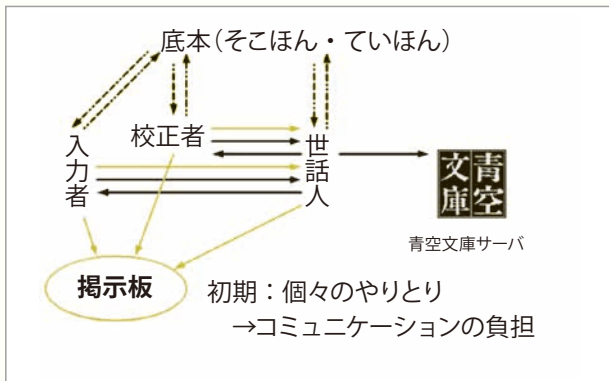


図-1 初期協働活動のイメージ図  
[色付がコミュニケーションを示す]

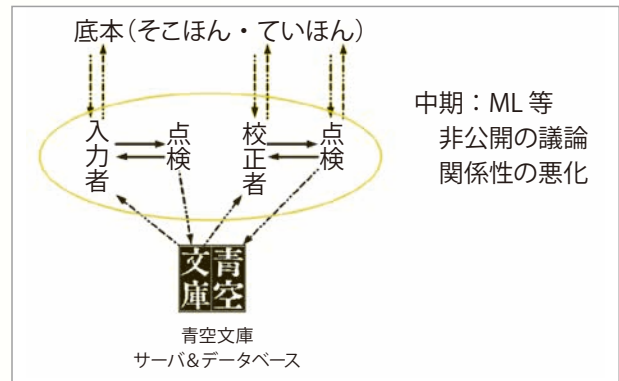


図-2 中期協働活動のイメージ図

様の本を集めたいという方針は示されていたが、実際の作業は4名だけが手分けして行うことが想定されていた。ところがほどなく提案に共鳴した人々が次々と現れ、協働活動の形をとることになる。

その経緯からか、クラウドとしては、少数の人間に複数の人間がぶら下がるという形になっていた。具体的には、個々のボランティアの入力したものを、「世話人」（ほぼ呼びかけ人と重複）がとりまとめ、そして校正を希望する人に差配し、作業の完了したファイルを整形してサーバにアップロードする。そして意見の交換・表明には、パソコン通信時代から普及していた「掲示板（BBS）」システムと、世話人へのメールが主に用いられた（図-1）。

この形態の場合、クラウドソーシングをうまく起動・駆動させるのは、カリスマと中心的運営の存在である。『ガッチャマン クラウズ』のGALAXにシンボルとしての「LORD GALAX」と運営中枢としての「総裁X」がいるように、青空文庫にも富田倫生氏や野口英司氏がおり、富田氏のカリスマ性と野口氏を始めとする呼びかけ人の運営によって、「インターネット図書館」としての青空文庫が形成されていった。

しかしこの形は、「世話人」への負担がかなり高くなることは否めない。クラウドが大きくなればなるほど、濃密なコミュニケーションと作業の負荷が世話人へかかるようになる。そして青空文庫が軌道に乗るとほぼ同時に、2001年にはこの形式でのクラウドソーシングが破綻を迎えるのである。

## ■ 中期

2001年末、それまでクラウドソーシングを機能させていた専従者としての「世話人」体制を、青空文庫は解消することになり、運営のほぼすべてをボランティアで担う形へと移行する。

これまで世話人が担っていたファイルの確認や整形・アップロードを「点検グループ」と呼ばれるボランティアチームが自主的な立候補によって務めるようになり（ただし移行後しばらくの名称は「世話人」のまま）、また開設以来、世話人によって手動で管理されていたデータファイルも、2002年には専用のデータベースが構築され、そこで管理保守されるようになる。これら一連の移行や日々の作業のための議論は、2000年に青空文庫のクラウドソーシングに導入された「メーリングリスト（ML）」で主に交わされた（図-2）。

参加者内でメール送受信が共有されるMLの登場は、呼びかけ人を含めた参加ボランティア（クラウド）を、ぶら下がる形ではなく、横一列もしくはゆるやかな輪でくくるような形態へと変えた。議論はボランティア内で共有され、活潑な意見交換がされるようになった。ボランティア同士で独自のグループやプロジェクトを作って作業するなど、クラウド作業の発展も数多く見られた。ところがこの形にもまた、やがて亀裂が走るようになる。

ボランティアというのは自発的な「意志」であるがゆえに、個々人の「意思」は強固である。それまで「世話人」を軸に「青空文庫」という「作業」だ

けでつながっていた群集が、MLで「思想」を晒し、付き合わせるようになると、やはりそこで差異が露わになり、さらに互いの齟齬も生まれる。作業方針だけでなく個々の文学趣味や態度まで意見が食い違い、クラウド内部に決定的な断絶までもが生じる。またこの形態では、カリスマ性さえも裏返し、「発言力」と「代表的」という性質が、クラウドソーシングの成果・功績を独り占めするものとして非難されることもあった。

『ガッチャマン クラウズ』でも物語中盤、クラウド活動の中心メンバがLORD GALAXに不満を抱いたことで、(敵役の介入もあってのことだが) GALAX自体が不安定になっていく。GALAXでの活動には、慈善行為を行うたびに「世界がアップデートされました」という通知で活動した個々人へのゲーミフィケーションが行われるなど、射幸心を煽る側面もあるのだが、青空文庫の活動が、公共図書館へのDVD寄贈計画や著作権保護期間延長問題、パブリックドメインの産業支援効果などでの注目から、次第に文化貢献と見なされてゆくにつれ、この中期の混乱も同様の問題を孕むことになった。

### ■ 後期

2000年代の後半に入ると、作業や意見交換のための掲示板の閉鎖や、MLの機能不全も目立つようになった。議論に疲れて作業から離れるメンバや、クラウド内の亀裂から活動そのものに失望してしまうボランティアも少なくなかった。クラウド自体の浄化を求め続ける人もあったが、結果としては、クラウドソーシングの継続を目指すために、形態はやむを得ず初期に近いものへと戻ることになる(図-3)。

初期の「世話人」ほどではないが、ファイルの管理を担う点検ボランティアと入力・校正ボランティアのあいだには、ゆるやかな壁が生まれ、そして一部の呼びかけ人を含む点検グループが、青空文庫のファイルと方針を守るある種のゲートキーパーとなった。この形態では、黙々と作業に励むことがある程度可能なため、活動としては安定するものの、中

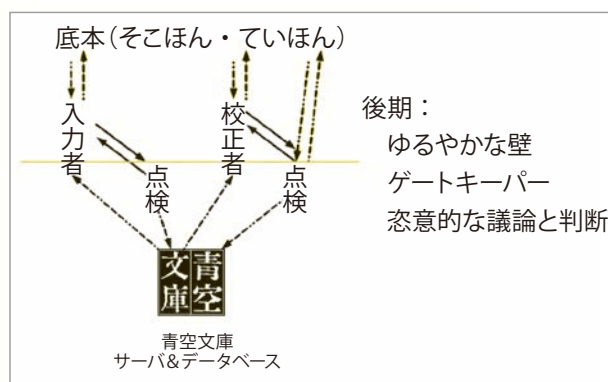


図-3 後期協働活動のイメージ図

期に比べて恣意的な議論と判断に流れがちであり、クラウド全体の総意を汲みづらくなるという問題点が残る。そして集団としての硬直化や、活動の敷居が高くなる点、いかにモチベーションを維持していくかなど、多年の運動による課題も山積しつつあった。

また、青空文庫の「インターネット図書館」というイメージも、2000年代中盤からのWeb 2.0の潮流においては、送り手から受け手への一方的なコンテンツ提供という側面から旧来のWebのあり方にとどまるものと見なさざるを得ない。

さらにクラウドの閉鎖性・不透明性は、ある意味では「悪の秘密結社」然とした様相も帯びさせることになる。初期から、市民による書籍の勝手な電子化は、法律に裏付けられたものであるとはいえ、出版業界の一部から敵視・海賊視されることもあった。「世界の変革」は「既存の社会の破壊」と裏腹であり、青空文庫の存在感が大きくなれば、その分だけ脅威と受け取られることもあるということである。「著作権保護期間の死後70年への延長に反対する署名活動」を行う政治的主体としての青空文庫が2007年の日本社会に現れたならば、なおさらである。『ガッチャマン クラウズ』の終盤、GALAXは物語の要請からか一種チープな「暴徒」の集まりへと転ずるが、いくらクラウド内部で理念があろうとも、外部からの見ようによっては「悪」にもなるのであり、青空文庫に参加する筆者としても、他人事では済まされない話であった。

## ■ クラウドからクラウドへ

しかし、クラウドはもう一度、大きく変容する。いや正確に言えば、クラウドとして生まれ変わる、だろうか。つまり単数から複数への変化だ。

転機は、大きなものを挙げるならば、2008年末のiPhone 3Gの日本上陸に端を発する、携帯情報端末の進化・発展・普及である。青空文庫とはそれまで、多かれ少なかれPC上で読むものであった。むしろPDAや電子書籍専用端末での読書もすでにあつたが、一般に通用したとはいいがたい。ところがスマートフォン・タブレット端末の登場が、長く試行錯誤されてきた青空文庫を読むためのソフトウェアの発展と相まって、青空文庫の本棚をアクセスされるものから、文字通り携帯されるものへと変えたのである。

それら端末とソフトウェアの組合せが画期的であったのは、「本棚」あるいは「開架」をコピーしたからだ。もし青空文庫の実体はその自由な「棚」であるとすれば、青空文庫のサーバ（データベース）そのものが青空文庫であると言える。手を伸ばせば誰でも届く本棚に、自由な本を集めることこそ活動の本体でもある。従来のソフトウェアは、青空文庫から個人がダウンロードしたファイルを個別に読み込ませるのが大多数であった。しかし「i文庫」や「豊平文庫」といったiPhoneアプリケーションは、アプリ内で青空文庫の開架を再現しているために、端末上にあたかも青空文庫があるかのような感覚を抱かせる。先んじて2007年にニンテンドーDS用ソフトウェアが数種登場し、そのほか2008年から2010年に数多くの青空文庫ビューワが各端末向けに生まれている。

こういった本棚のコピー・再現を保障するのは、2003年の年始から提供された「公開全作品 csv」だ。また継続的に行っていたCD・DVDでの青空文庫全ファイルの配布に代わるgithubでの提供も、本棚の複写を支援する。携帯情報端末や電子読書端末・EPUBの普及によって、「達人出版会」<sup>4)</sup>や「book☆walker」<sup>5)</sup>などでの青空文庫収録作品ファイルの再配布も盛んになり、青空文庫はハイパーリンク

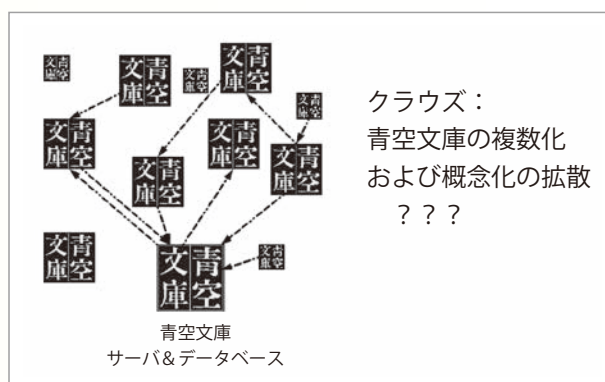


図-4 増殖する青空文庫のイメージ図

の宛先から、コピーの源泉へと変化してゆく。

ライブラリの観点から見ると、当初インターネット上の家庭文庫めいたものとして始まったものが、電子的な巡回文庫のような役割で、蔵書が各電子書籍ストアやアプリに活用されている、ということなのだろう。

しかし何よりも不思議なのは、こうしてコピーされた本棚もまた「青空文庫」と呼ばれることである。実際は青空文庫の本棚（データベース）とは別物であるにもかかわらず、再配布サイトでもアプリケーションでもまた、書架は「青空文庫」と称され、アプリやサービスそのものが「青空文庫」を名乗ることさえあり、それぞれで独立した活動が試みられている（図-4）。

「青空文庫」という単一のクラウドであったはずのものが、いつの間にかコピーによって増殖し、個別の複数の活動として「クラウド」へと変容していったのである。

## 「青空文庫」の普通名詞化

さらに興味深い事象としては、青空文庫の作品ファイルに用いられているマークアップが「青空文庫形式」と呼び習わされている点である。そのマークアップが、インターネット上で交換されるテキストファイルに対して、（青空文庫の書架を通さない）個人的な利用であっても採用され、それ自体が知らず知らずにオープンソース化してしまっていた。2010年の「注記一覧」と「組版案内」の公開は、

この流れのあとを追ったものだ。

かつてならばクラウドの外にあったものにまで「青空文庫」（あるいは「青空〜」）という名称が通用している事実は、青空文庫という概念自体がオープンソース化していることを示唆する。青空文庫の書架をコピーしたり再現したり、あるいは「青空 WING」<sup>6)</sup> のように蔵書や書架の形を組み替えて何らかの形でその成果を利用したりする行為、そしてパブリックドメインとその共有を育む活動そのものもみな、「青空文庫」というわけだ。電子書籍サイト内で配布されるパブリックドメイン作品には、PD ではなく「青空文庫」と記されているように、著作権保護期間が満了している印としても「青空文庫」は用いられることがある。青空文庫内にないパブリックドメインのテキストも「青空文庫」と呼ばれ、twitter ではある作家の著作権が切れていることに対して、「××はもう青空文庫か」とも呟かれる。

『ガッチャマン クラウズ』の最終話では、「ガッチャ」というフレーズが慈善行為の合い言葉としてオープンソース化する。そしてまた「青空文庫の提

案」に描かれた理念も、17年の時を経て、「青空文庫」という言葉の普通名詞化へと近づきつつある。たとえもし、明日にでも旧来の「青空文庫」の本体サイトとデータベースが失われたとしても、コピーされ増殖された「クラウド」としての「青空文庫」の書架と活動が消滅することは当分ないだろう。

#### 参考文献

- 1) <http://www.aozora.gr.jp/>
- 2) ジェフ・ハウ, 中島由華訳: クラウドソーシング みんなのパワーが世界を動かす, 早川書房, 東京, pp.22-23 (2009).
- 3) 前掲書, pp.15-16.
- 4) <http://tatsu-zine.com/aozora/>
- 5) <http://bookwalker.jp/ex/sp/aozora/>
- 6) <http://aozorawing.sourceforge.jp/>

(2014年1月31日受付)

■ 大久保ゆう holmes@alz.jp

1982年生。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位認定退学。修士（人間・環境学）。初期より青空文庫にボランティアとしてかかわる。現在、フリーランス翻訳家、大阪市立大学・同志社大学非常勤講師。